

# 騎士の教育・騎士の教科書

小路 邦子

## 騎士の教育

一四八四年あたりに、キャクストンは自らフランス語版から訳した『騎士階級の書』*The Book of the Order of Chivalry* を出版した<sup>1)</sup>。これは、一二三五年にマジヨルカで生まれ、カタロニア語で著したラモン・ルルの書*Le Libre del Orde de Cavalleria* を基にしている。十三世紀に著され、フランス語、スコットランド語、英語、そしておそらくラテン語でも存在し、かなり広く読まれたらしい。この本は、騎士の叙任を受けに行く途中、森の隠者の許に迷い込んだ若者に、騎士の心得について何も知らないことに気づいた元騎士の隠者が、貸し与えた書物という体裁を取っている。ちょうど、何も知らないペルスヴァルがゴ

ルヌマンの許で教えを受けるように、若者は騎士とはいかにあるべきかを教えられ、宮廷に行つてから他の者たちにもこの書を読ませる。エルスベス・ケネデイによると、ルルは『散文ランスロ』を用いているようだが<sup>2)</sup>、湖の貴婦人がランスロの騎士としての出発にあたって与える、騎士道についての訓示とはその起源については大旨同じだが、以後の騎士の装備の象徴性は全く異なっている。

騎士の起源について、この書は次のように説き起こしている。

慈愛と忠誠と真と正義と真実とが世界に降ってきた時、その後、残酷と危害と不忠と偽りが始まった。そのため、世の中には間違いと厄介事が生まれた。そこに、神は人を作り、人によって知られ、愛され、疑われ、仕えられ、称えられよ

うとした。初めに、世の中に軽蔑がやつて来ると、正義が怖れによつてかつてのように名誉に立ち返つた。そして、あらゆる人は、千人ずつに分けられ、千人ごとに最も誠実で、最も強く最も気高い勇気があり、他の者よりもよく教えを受け、行儀の良い者が選ばれた。そして、どの生き物が最もふさわしく、最も美しく、最も勇気があり、苦勞に耐えるのに最も強く、人間に仕えるのに最も有用か調べ、捜した。そして、馬が最も気高く、人間に仕えるのに最もふさわしいとわかつた。そこで、あらゆる動物の中から、人は馬を選び、そうして千人の中から選ばれた者に与えた。フランス語でシユヴァルと呼ばれる馬にちなんで、その人はシユヴァリエと呼ばれ、英語では騎士という。こうして、最も高貴な人が、最も気高い獣を与えられた。

そして、騎士階級に入ろうとする者は、この高貴なる騎士道の始まりに思いをいたさなくてはならないとする。また、騎士は息子に幼いうちに馬の乗り方を学ばせ、従者として馬の世話ができるようにしなくてはならない。さらに、幼いうちに食卓での切り分け方、武器の扱い方、騎士を装わせるやり方を学ばなくてはならないと述べられる。しかし、こうしたことを学んだら、騎士に付き従つて槍試合や戦いに行くだけでは不十分で、他の学芸のように本にして読めるようにしなくてはならないと主張している。そして、騎士の子はまず始めにそうした学を学

ばなくてはならないと言う。他の学芸のように書かれて学校で読まれるものとなつていないのは、騎士階級にとつて大いなる間違いだと言つて述べている<sup>(3)</sup>。

ここで触れられている「他の学芸」とは、もちろんいわゆる「自由七科」のことである。これは、古典古代の時代に、手仕事をする奴隸などではない自由な身分の者が修めるにふさわしい学芸とされたことによる名称であつた<sup>(4)</sup>。それは周知の通り、文法・修辭学・論理学・算術・幾何学・音楽・天文学を指す。おなじくキヤクストンがフランス語から訳して出版した『世の鑑』*Mirror of the World* (一四八〇年)<sup>(5)</sup>によると、これらは互いに関連したものであるから一つを正しく学ぶためには、他の全てを学ばなくてはならない。しかしここでは、「自由七科」の謂れが、音楽の項で次のように説明されている。人の身体を癒すことを目的とした学には自由 (*freedom*) がない。人の魂を目的とする学は自由 (*liberal*) の名に値する。というのも、魂は自由 (*liberal*) でなくてはならないからだ。七学芸は魂を自由 (*free*) にし、あらゆる悪から解放するから、自由 (*liberal*) である<sup>(6)</sup>、<sup>(7)</sup>。

しかしながら、『騎士階級の書』において学芸に触れているのは前記の箇所と、判事として十分な努めを果たせるように学を修めていなくてはならない、と述べられる箇所のみである<sup>(7)</sup>。中世の聖職者はおつぱら本に限っていたが、従者は学芸をまるつきりなおざりにしたわけではないにしても、自身が

卓越すべき眼目をもつばら追い求めることに一番注意を払っていたと、この書の序で編者は述べている<sup>(8)</sup>。確かに、これ以外に学問に触れてはいないが、むしろこれは、自由七科を修めることは当然の前提とされているように思われる。その上で、騎士たらんとする者はいかにあるべきかが述べられているのではなからうか。それは、キャクストンが同書の跋文に記したことからも窺える。そこには、とある高貴な従者の頼みでフランス語から英語に訳したこと、同書は一般の庶民が必須とすべき書ではなく、徳によつて気高き騎士階級に入らんとする高貴な生まれの人が持つべき物であることが記されている<sup>(9)</sup>。そして、高貴な生まれの子弟にはしかるべき教育が授けられていた。

十二世紀後期から十四世紀にかけて、完璧なる君主への関心が高まり、ジョン・オブ・ソールズベリの『ポリクラテイクス』*Polycraticus* (一一五九年)に始まる君主論が生み出される<sup>(10)</sup>。そこでは、君主に必要な資質が述べられ、君主は人間の頭に喩えられた。君主は、神とその役目を地上において行なう者にもみ服従する。君主は神によつてその座につけられた。貞節で、貪欲を避けなくてはならない。文字を学ばなくてはならない。慎ましくなくてはならない。自分ではなく、他者の福祉を求めなくてはならない。肉と血の愛情はまったく忘れ、臣下の福祉と安全が求めることのみをなさなくてはならない。臣下にとつての父でもあり、夫でもなくてはならない。適切な救済策により、過ちを正さなくてはならない。愛想良く話し、気前よ

く恩恵を与えなくてはならない。慈悲で正義を和らげなくてはならない。あらゆる犯罪や過ちを公平に罰しなくてはならない。賢明なものにも、愚かなものにも、小さな子供や老人に対しては義務がある。彼の盾は、弱者を守り、邪なる者の矢をかわさなくてはならない。寡婦と孤児を守らなくてはならない。軍隊が暴虐をするのを抑えなくてはならない。法と軍事を学ばなくてはならない。下層階級の福祉に必要な物を全て与えなくてはならない。軽率を避けなくてはならない。公の福祉の手段を処理する責任がある。名譽を分け与える者である。貧しい者の叫びに耳を塞いではならない。教会の屋根を高く掲げ、広く宗教を広めなくてはならない。聖所侵犯や略奪から教会を守らなくてはならない。そして、自分が統括する共同体全体で、誰も悲しむ者のないように努めなくてはならない。こうした努めを果たすことが、君主には求められた。

ギラルダス・カンブレシスは、しっかりと文字を学ばなくてはいけない、とシャルルマーニユを例に出して、学ぶことにははつきりとした利点があると述べている。そして、歴史を学ぶことで、戦略とその結果についての例が役に立つとしている。彼は、モーゼに始まる聖書の人物、ローマ皇帝、そしてアーサー王までの善き支配者を引き合いに出している。また、アエギディウス・ロマーヌスは、君主は慎重でなくてはならないとする。そのためには、自国のことを良く考え、慎まなくてはならない。威厳を持ち、共感でき、親切で、真実に溢れていなく

てはいけない。活動的で、人民に楽しみを勧め、また公正でなくてはならない。勇敢ではあつても、無分別ではならない。鷹揚であれば、人民の愛を勝ち得る。物惜しみせず、大度でなくてはならない。名誉を愛し、同時に謙虚でなくてはならない。臣下と良い関係でなくてはならない。しかし、己の権威が下がらないように威厳があり、尊敬に値しなくてはいけない。この結果、人民は君主とその法に従うのである。とりわけ、庶民の幸福を愛さなくてはいけない。

コスマンは、アーサー王ロマンズの三人の主要な騎士、トリスタン、パーシヴァル、ラーンスロットの幼年期とその教育について、広範で緻密な研究<sup>11)</sup>を行ない、ランスロやバルツイヴァルの教育がこのジョン・オブ・ソールズベリやアエギデイウス・ロマーヌスが支配者に提唱しているものと似ていることを論じた。こうして、右に挙げられた項目は、一人君主にのみ当てはまるものではなく、騎士にも当てはまる項目となる。しかし、ジョン・オブ・ソールズベリやギラルダス・カンブレンシスはもっぱらフランスにおいて普及し、イングランドでは広まらなかった<sup>12)</sup>。そして、こうした君主論も二二一六年以降イングランドでは書かれなくなり、十四、五世紀までは伝統となっていないかった。わずかに、若きエドワード三世のために二冊のラテン語の鑑が作られたくらいである。だが、アエギデイウス・ロマーヌスの『君主の支配について』*De Regimine Principum* や、アリストテレスの『政治学』*Politics* へのラテン語のバー

レーによる注は広く読まれた。また、十三世紀後期には、フランス語版の偽アリストテレスの『秘中の秘』*Secretum Secretorum* がイングランドで作られ、騎士階級の教育への関心が示されている。こうして、君主に当てはまることは一般の貴族や騎士階級にも必要な徳目とされ、十二世紀半ばから十三世紀半ばには、俗人貴族にも識字が広まっていた。そして、だいたい四歳(ジョン・ハーディングの提唱)から七歳くらいに字を教え始め、教育は六、七年続けられた。「無学な王は戴冠せるロバなり」という格言は、広く行きわたっていたのである。

さて、『騎士階級の書』において、ルルは騎士の勤めを次のように述べている。騎士道とは正義を守ることであり、騎士は公正でなくてはならない。騎士の勤めは、聖なるカトリックの信仰を維持し、守ることである。騎士はすべからず、大きな領地の支配者でなくてはならない。皇帝は自身騎士であり、騎士たちの主君でなくてはならないが、一人では支配できないので、騎士たちが助け騎士階級を維持しなくてはならない。騎士は世俗の主君と天上の王を守らなくてはならない。正義の争いにおいて暴力を避け、騎士と聖職者が集まったときに判事として耐え得るだけの学を修めていなくてはならない。正義は騎士によつて保たれるのが一番ふさわしいからである。一騎打ちや馬上槍試合に行き、食卓を開放し、鹿や猪や野生の獣を狩るようにならなくてはならない。こういうことをすることで、騎士階級を維持するための腕を鍛えるためである。肉体と同じく、精神

も養わなくてはならない。騎士道は勇氣の氣高きにある。叡知を愛して、騎士階級を愛し、名譽を齎さなくてはならない。婦人や、寡婦、孤児、病人、弱い者を守らなくてはならない。慈悲がなくてはならない。貧しい人々から略奪や強奪をしたり、身を守ることのできない婦人や寡婦に非道な振舞いをしてはならない。それは、高潔なことではなく、悪徳である。城と馬を持ち、道を守り、土地で働く者を守り、人々に義を行なうために、街や市を持つべきである。相応の財産の無い者は、略奪者になるからである。犯罪者や盗つ人を罰することが勤めである。以上のような騎士の勤めを述べた後、従者が騎士の叙任を受けるための手続きを述べ、こうした勤めを果たすためには、不具であったり太り過ぎていてはならないとする。次いで騎士の裝備の象徴性を描写している。

キヤクストンは、この『騎士階級の書』に記されたことが、今では忘れられ、騎士道が昔のように名譽を払われてもいないし、行われてもいないと言う。その昔には、イングランドの騎士の氣高い行ないは世界中にその名が高かった。そして、円卓の氣高き騎士と氣高きブリテンの王アーサー王を見よ、と言いつ、イングランドの騎士たちよ、その当時に行われていた氣高き騎士道の習慣はどこへ行ってしまったのか」と嘆く。さらに、「聖杯の巻やラインスロットの巻、ガラハドの巻、トリストラム（13）の巻、危険な森の巻、パシヴァルの巻、ガウエインの巻、その他大勢の巻をお読みなさい」と勧め（13）る。それは、「生ま

れの良き方々が、古の騎士道の習慣や偉大なる名声に立ち返るよう」にであり、「高貴なる血筋に生まれ、氣高き騎士の階級に入らんとする者は皆、この書を読み、そこに書かれている教えを守って実行するように」（14）との意図からである。同じことは、キヤクストンが一四八五年に出版したマロリーの『アーサーの死』*Le Mort Darthur* に付した序文においても述べられている。

さて、私その写本にもとづいて印刷しました目的は、高貴な方々が、騎士道の華々しいわざや、当時の一部の騎士たちがならいとした君子らしい有徳の行為をお読みになって、学ぶことがおできになるようにということです。また、そういう騎士たちは立派な行為によつて譽れを得ましたが、それにひきかえ、悪徳漢は罰せられ、たいがい恥をかかされ、非難をあげたということです。どうか、高貴な殿方やご婦人方をはじめ、その他どのようなご身分の方々も、この書物をお読み下さる時には、中に書かれている立派な誠実な行為をよくご記憶にとどめられまして、みならつて下さいませよう、伏してねがい上ぐる次第であります。この書物の中には、心楽しい物語もたくさんありますし、慈悲深い、高潔な武勇の、氣高い有名な事績の数々ものつています。すなわちこの書物の中には、氣高い騎士道もあれば、礼節、慈悲、友愛、勇氣、愛、友情、さらに、臆病、殺人、憎悪、徳と罪もあります。

どうか善をみならつて悪を遠ざけて下さい。そうすれば必ずや皆さまは良い評判と名声を勝ち得るでありましょう。……

さて、例の書物のことをもすこし申し上げます。私がこの書物の読者として考えておりますのは、高貴な王侯、貴族、貴婦人、身分ある殿方、淑女がたのうち、当時ブリテンと呼ばれたこの立派な王国の、かつては王であつた、偉大なる征服者にして優れた王者アーサー王に関する気高くも心たのしい物語を読みたいと願われる方々すべてであります。私こと、ウイリアム・キヤクストンと申す卑しき者が印刷を心掛けましたこれなる書を捧げまつります。氣高い行動の数々、騎士たちの武勲の数々、勇氣、豪胆、慈悲、愛、礼節、氣品について語り、さらにふしぎな物語の数々、冒険談などもたくさん織りこみました。(厨川文夫・圭子訳)<sup>(15)</sup>

このように、キヤクストンは自身の印刷した書が、身分ある人たちがそこから学ぶための教科書となることを明確に意図していた。そしてそれは、一四六〇年代にエドワード四世の登極と共に、イングランドに騎士道が復活してきた時代であり、馬上槍試合への関心が新たに変わった時である。しかし、すでに馬上槍試合は半世紀の間廢れていた後だった<sup>(16)</sup>。では、そうした時代に彼が読むことを勧めたマロリーのアーサー王の書は、どのようにその教えを伝えているのだろうか。一部を見て

みたい。

### 騎士の教科書

アーサー王は結婚にあつて、新たに甥のガウエインとペリノア王の庶子トールを騎士に叙任した。二人は祝宴の最中に起きた事件を初めての冒険として、ペリノア王と共に出て行く。その冒険において、ガウエインは慈悲を乞い求めた騎士に慈悲を与えようとせず、止めに入った貴婦人を誤つて殺してしまう。これによつて、彼は宮廷に戻つてから、王妃らの審問を受け、生涯貴婦人の味方となり、その争いのために戦うこと、常に礼儀正しく、慈悲を乞い求める者には決して拒んではならないと審判が下された。

一方、トールはこれとは逆に、すぐさま慈悲を与え、また他の騎士に慈悲を与えなかつたアペリウスには慈悲を拒み、その酬いを受けさせた。このアペリウスは告発した乙女によつて「偽騎士」*false knight*と呼ばれた。騎士の勤めをないがしろにしたからである。

またペリノア王は、冒険の途上で見かけた傷ついた騎士を抱えた乙女の助けを求める声に耳を貸さず、彼女は死んだ騎士の剣で自害する。じつはこの乙女はペリノア王の娘だったことを後にマーリンから教えられる。この酬いに、彼は自分が殺され

る時、誰よりも信頼する者に見捨てられる運命になると告げられる。

この三つの冒険にはそれぞれ、慈悲を与えることの重要性、婦人のために果たすべき勤めをないがしろにした酬いが述べられている。この直後に有名な円卓の騎士団の誓いが述べられる。

そこで王は全ての騎士を任じ、富と土地とを与えた。そして、決して非道を行なったり、殺人を犯したりしてはならぬ、常に裏切りを避けよ、慈悲を乞う者には慈悲を与えよ、さもなくば己の尊厳とアーサー王の庇護を失うことになる、常に貴婦人や、乙女、淑女、寡婦を助け、その権利を擁護し、決して無理強いしてはならぬ、さもなくば死だ、と命じた。また、いかなる者も愛や世俗の財産のために、誤った争いにおいて戦ってはならぬと命じた。そこで、円卓の騎士は老いも若きも、皆このことを誓った。そして、毎年聖霊降臨祭の大祭の祝宴の席で同じように誓ったのである。<sup>(17)</sup>

円卓の創成期にあたって、騎士としての義務と勤めを簡潔にまとめている。これは先のルルが挙げた項目とも一致する。そしてまた、これがあるからこそ、『散文ランスロ』で湖の貴婦人が、ランスロに与えた訓示がなくてもすむのである。

さらに、ローマ遠征に出たアーサーは、捕虜を取返そうとするルーシアスの軍と戦って勝利を収めた部下たちとの間で、名

誉と恥についてのやり取りを行なう。

そこでアーサー王はさめざめと涙を流し、ハンカチで涙をぬぐうと言った。「諸君の勇氣と大胆さが身の破滅となる所だった。撤退したとしても名誉を失うことはない。圧倒的な敵に対して踏みとどまる騎士は、愚かとしか言いようがない」

「いいえ、そんなことはありません」とランスロット卿は言った。「それは永遠に我らの恥辱となったことでしよう」

「その通りです」クレジス卿とポールス卿は言った。「一度騎士が恥を受けたなら、それを雪ぐことはできません」<sup>(18)</sup>

最後のクレジス卿とポールス卿の言葉は、キャクストン版にはないが、マロリーが騎士にとつての恥をどのように考えていたのかをよく示している。しかし、同時にアーサーの言葉に見られるように、無謀をよしとしているわけでもない。

さらに、アーサーはウルビノの城市に来ると、全軍に対し布令を出して、アーサーの軍に属する者は乙女や貴婦人、市民の妻と同衾した者は命や手足を失い、財産は没収すると命じた<sup>(19)</sup>。このローマ遠征の物語の最後には、キャクストン版のみ存在するアーサーの布令がある。それは「帰途、代金を支払うのであれば、食糧その他を盗んだり、とつたりしてはならぬ。犯

した者は死刑に処す」(厨川訳)という、略奪や強奪を禁じるものである<sup>(20)</sup>。ローマ遠征の物語に手を入れたのはキヤクストンであることはほぼ定説となっているので、これは彼の手により挟み込まれた台詞ということであろう。百年戦争や薔薇戦争の混乱の中で、強奪に苦しめられた庶民の代弁をしているような気がする。そして、これらのアーサーの言葉や布令によって、この物語の典拠である『頭韻詩アーサーの死』に描かれたアーサーよりも、マロリーのアーサーはより優しく思いやりのある、騎士道にふさわしい王となっているのは、ラリー・D・ベンスンの指摘する通りである<sup>(21)</sup>。

ガレスの物語では、謙遜と忍耐の美德とでもいったものが示される。彼は兄ガウェインの七光りに依らずに、自らの手で騎士としての立場を確立していく。しかも、口汚い貴婦人の罵倒にも逆らわず、自己を制御して、着々と自身の生まれの高貴さを証して行くのである。そして、彼も赤の国の赤の騎士アイアンサイドに対して慈悲を示す。

トリストラムの物語に挟まれたラ・コート・マル・タイユの話では、このガレスと同じように、若い騎士が乙女から口汚く罵られる。その時、モードレッドが彼女をたしなめて言う言葉は、訓練の重要さを教えている。

「まだ、しっかりと馬に跨がってはいられないが、慣れて訓練を積めば、立派な騎手となりますよ。でも、剣を振るう

となると、見事で力強いではありませんか。……湖のラインスロットだって、騎士になりたてのころは、馬上ではよくひどい目に遭っていたものです。でも、徒歩となると、名誉を挽回し、円卓の騎士を何人も殺し、恥をかかせました。それゆえに、ラインスロット卿が多くの騎士に恥をかかせたおかげで、手練れの連中も気をつけるようになったのです。何度となく目にしましたが、年季の入った騎士が、ほんの駆け出しの若い騎士に恥を受け、殺されることもあるのです」<sup>(22)</sup>

また、この物語ではトリストラムの誕生から幼年期の出来事が詳しく語られるが、ラインスロットやパーシヴァル、ガウェインらが幼年期無しで、一人前の騎士となつてこの作品に登場してくることと較べると、これは特殊なことである。もちろん、彼らの生い立ちをいちいち繰り返すのは冗長になるし、無駄なことかもしれない。しかし、それだけに、ここでトリストラムの生い立ちが詳しく語られるということは、注目に値する<sup>(23)</sup>。

彼は父の許で大切に育てられるが、継母によって二度も毒殺されかかる。それでも、彼女の命乞いをする。自分を殺そうとした継母を憎んで当然ではないか、と問う父に彼は聖人のようにこう答える。「そのことですが、どうかあの方を許して下さい。ようお慈悲をお願いいたします。わたしとしては、神がお許し下さいますようお願いすし、わたしも許します」<sup>(24)</sup>

その後、息子の身を案じた父は、ゴヴェルナイル Governayle



という学があり教養もある者をつけて、彼を勉強のために国外に送り出す。この *Governayle* という名前は、家庭教師 *governor* を想起させる名である。そこで、トリストラムは言葉を選び、武器の訓練や鍛練を積む。また、堅琴の腕が優れ、若いうちには堅琴や様々な楽器を学び、身体ができてくると、狩りや鷹狩りをした。このことは、プラトンが『国家』において、体操と音楽を修めなくてはならないが、まず音楽を先に修めるべきであり、身体ができてから体操にいそむべきであると説いていることを想起させる<sup>(25)</sup>。そして、このトリストラムの教育についての記述は、マロリーの典拠とした『散文トリスタン』には無いものである<sup>(26)</sup>。特に、音楽と狩りの技については、マロリーは他に見られないほどの手放しの賛辞を三度も与えている。コスマンはトリストラムの教育が物語の後の段階に影響を及ぼすことはない、と述べている<sup>(27)</sup>。しかし、マロリーでは彼の堅琴の腕が、媚薬に取って代わっているのである。イゾードに堅琴を教えることで、媚薬の登場する遙か前に、姫はトリストラムに愛情を寄せている。そのため、媚薬は単に物語の約束事として形式的に出てくるのみで、二人の愛に決定的な役割は果たしていない。このことは、マロリーが作品の進展と共に、魔法を排除してくる傾向とも重なる。しかも、彼がマルク王に殺されるのは、イゾードの前で堅琴を弾いていた時であった。このように、堅琴が二人の愛の始まりと終わりを画している。マロリーは、トリストラムに智と力と愛を体現する騎士像を描き

出している。

騎士の勤めの一つである、宗教の擁護者という像を、トリストラムのパロミデスへの受洗で示してこの物語を終えたマロリーは、さらに精神的な騎士像を、聖杯探索においてガラハドに示す。しかし、それはマロリーにとつての究極の騎士像ではない。そのことは、ランスロットを不完全ながらも第四の聖杯の騎士として提示していることに見られる。そして、聖杯探索も円卓の騎士の冒険の一つとし、戻ってきたポールスが再び円卓の秩序の中に組み込まれることで、天上の騎士道からこの世の現実の騎士道に戻ってくる。

ウルリー卿の治療において、円卓の騎士たちが次々と失敗する中で、ランスロットは慎ましく神に祈りを捧げてから、治療に成功する。再び世界一の立派な騎士となったランスロットは、ぶたれた子供のように泣いたが、彼が泣いたのはそのためではない。聖杯探索において、自身の罪を厳しく糾弾され、最終的な探索にも失敗した彼の、慎ましく謙虚に祈った祈りが聞き入れられたからである。また、その前のメリアグランストの戦いにおいては、卑怯で裏切り者の騎士と、武装を半分にし、片手を縛りつけて戦うランスロットとの対比が描かれる。しかも、ランスロットが相手を殺すのは、王妃の意向に沿ってのことである。ここでは、忠誠と裏切りとが描かれている。ランスロットは、最後まで王と王妃に忠実である。彼は決して王とは戦わない。しかし、彼が「正、不正を問わず」<sup>(28)</sup> 王

妃を護るために戦うと、誤った戦いはしないという円卓の誓いに背くことを明言した辺りから、円卓の内部崩壊がじわじわと始まっていた。

王妃の不貞を明らかにされたアーサーは、証拠と証明とに依り王妃に刑を宣告する。興奮のあまりの措置とは言え、きちんと法的手続きを遵守したもので、「当時の法律では、身分、地位にかかわらずなく、反逆の罪ありと認められた以上は、死以外につぐないの途はないのであった。」(厨川訳)<sup>(29)</sup>

第二人をランスロットに殺されたことを知ったガウエインは、アーサーにこう迫る。「王さま、御主君、叔父上、ここに一つの誓いをたてます。……ですから、王さま、どうぞ戦さの御準備をお願いします。ランスロットに復讐してやりませぬ。私の奉仕と愛をおのぞみなら、どうぞ急いで戦さの準備をなさって下さい。」(厨川訳)<sup>(30)</sup> ここでガウエインがアーサーに迫っているのは、戦いを起こさないと、君主と臣下との相互の契約を破棄するという「契約放棄」*diffidatio* なのである。アーサーがこれを聞き入れるのは、単に肉親の情や復讐のためだけではない。臣下としてのガウエインを失わないためなのである。

以上、さわりだけではあるがマロリーがその書の中で示した騎士のあり方は、同時に君主論に示された事柄とも一致する。単に特定の騎士に理想が示されているのではなく、作品全体がキャクストンの意図したように、騎士とはいかにあるべきかを

提示し、騎士精神の気高さを称えている。ルルが名誉を何にもまして大切なものとしたように、マロリーでも名誉を重んじ、恥を受けることを潔しとしない。また、マロリーの語りそのものも、男性読者を前提としたような、細かな情感の分析を排除したものとなっている<sup>(31)</sup>。そしてルルが、気高さのない者を騎士にすることは、鏡を手にしてばかりいる女を騎士にするよりなものだ<sup>(32)</sup>、と述べているのと軌を一にするように、マロリーには女騎士は登場しない。こうして、キャクストンが同時代の高貴な人々に向けて出版したマロリーの書は、その前に出版されたルルの書で述べられたことの、実例として機能しているのである。

注

- (1) Ramon Lull, trans. William Caxton, *The Book of the Order of Chivalry*, ed. Alfred T. P. Byles, EETS OS 168, 1926, rpt. 1971. 本書のフランス語写本は多数あるが、キャクストンはほぼ逐語的に訳しているので、基になった写本の見当をつけることができる。おそらく、大英図書館所蔵になる十五世紀前半の Add. MS. 22768 がほぼ一致するものと思われる。
- (2) Elspeth Kennedy, 'The Knight as Reader of Arthurian Romance', in *Culture and the King: The Social Implications of the*

- Arthurian Legend, *Essays in Honor of Valerie M. Lagorio*, eds. Martin B. Shichtman and James P. Carley, State University of New York Press, 1994, p.83.
- (3) *The Book of the Order of Chivalry*, p.22.
- (4) Ernst Robert Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, trans. Willard R. Trask, 1948; Princeton University Press, 1953, 1973, p.37.
- (5) Ed. Oliver H. Prior, *Caxton's Mirror of the World*, EETS ES 110, 1913, rpt. 1966.
- (6) *Ibid.*, p.38–39.
- (7) *The Book of the Order of Chivalry*, p.30.
- (8) *Ibid.*, p.xxxviii.
- (9) *Ibid.*, p.121.
- (10) Lester Kruger Bonn, 'The Perfect Prince: A Study in Thirteenth- and Fourteenth-Century Ideals,' *Speculum* 3 (1928), 470–504. この中では、他にギラルダス・カンブレレンシス、ギルバート・オブ・トゥルナイ、トマス・アキナス、ウイリアム・ペロールト、アエキテイウス・ロマーヌス、ジャック・ド・セッソル、マルシリヨ・パドゥア、トマス・オックリーヴ、および逸名作者による *Liber de Informacione Principum* 及び *Speculum Dominarum* が扱われている。
- (11) Madeleine Pelner Cosman, *The Education of the Hero in Arthurian Romance*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1965.
- (12) Nicholas Orme, *From Childhood to Chivalry: The education of the English kings and aristocracy 1066–1530*, London & New York: Methuen, 1984, p.90.
- (13) *The Book of the Order of Chivalry*, p.122.
- (14) *Ibid.*, p.124.
- (15) E・マロリー、W・キヤクストン編『アーサー王の死 中世文学集Ⅰ』、厨川文夫・圭子編訳、ちくま文庫、一九八六年。以下、マロリーの引用は厨川訳と明示しない限りは、拙訳による。
- (16) Richard Barber, 'Chivalry and the *Morte Darthur*,' in *A Companion to Malory*, eds. Elizabeth Archibald and A. S. G. Edwards, Cambridge: D. S. Brewer, 1996, pp. 19–35.
- (17) *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Eugène Vinaver, rev. P. J. C. Field, third ed., in three volumes, Oxford: Clarendon Press, 1990, p.120. 以下、*Works* として記す。
- (18) *Works*, p.217–218.
- (19) *Works*, p.243. キヤクストン版には、市民の妻への言及と財産の没収は述べられていない。
- (20) *Works*, p.246.
- (21) Larry D. Benson, *Malory's Morte Darthur*, Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press, 1976, p.49.
- (22) *Works*, p.466.
- (23) トリストラムの項については、詳しくは拙論『文武両

道の騎士を求めて——From 'Tristan to Tristram'——」(菅野正彦他編『Medieval Heritage 中世英文学の伝統』雄松堂出版、一九九七年、五二九―五四二頁)を参照。コスマンは、英雄の教育期間があることは、乙女の救出やドラゴン退治と同じく、彼の勲にとって必要なことのようにだと述べている。Cosman, p.139. この点において、アーサーの成育や教育も述べられていないので、トリストラムの成育が例外的に唯一詳しく述べられることは、マロリーにとってのトリストラムの重要性をより一層示しているように思われる。

(24) Works, p.374.

- (25) プラトーン『国家』第二巻、一七、三七六e以下。
- (26) ヴィナーヴァの注参照。Works, p.1456.
- (27) Cosman, p.47.
- (28) Works, p.1058.
- (29) Works, p.1174.
- (30) Works, p.1186.
- (31) Sir Thomas Malory, *Le Morte Arthur: The Winchester Manuscript*, ed. and abridged by Helen Cooper, Oxford University Press, 1998, pp. xvii–xviii.
- (32) *The Book of the Order of Chivalry*, p.58.